

公益財団法人
荒川区芸術文化振興財団
Arakawa City
Art Culture Promotion Foundation▶ リンク集 文字サイズ 小 中 大

トップ > 荒川の人 > No.212

No.212 齊賀 靖佳(さいが やすよし)

NPO法人 荒川区高齢者クラブ連合会 理事長

「活動する高齢者」たちが、喜び合える社会を目指して

高齢者同士が支え合う「友愛活動」の架け橋となる

「NPO法人 荒川区高齢者クラブ連合会（以下、荒高連）」は、昭和37年に「荒川区老人クラブ連合会」として結成されました。「老人クラブ」という名称は、「時代にそぐわない」として、のちに「高齢者クラブ連合会」に改名。平成14年には、老人クラブとしては全国でただひとつ、「NPO法人」の認可を受けています。

高齢者の可能性を引き出し、魅力あるクラブづくりに全力で取り組んでいるのが、理事長の齊賀靖佳さんです。

齊賀さんが高齢者クラブの活動に関わるようになったのは、平成7年からです。「63歳で定年を迎え、総務の仕事で「ちょっとだけ、お手伝いするつもりが、いまでは「首まで、どっぷりつかっています（笑）」

齊賀さんは、昭和4年生まれ。終戦の混乱が治まらぬころから、建設設備のシステムエンジニアとしてまい進。中近東など海外にも渡って、建築積算ソフトの構築に従事したそうです。

「定年までの40年間は、地域の活動に参加したことはほとんどなかったし、荒高連のことも知りませんでした（笑）」といいますが、現在は一変。「荒高連」の理事長をはじめ、「東京都老人クラブ連合会 副会長」「西尾久三丁目 町会長」「環境清掃推進委員会・常任理事」など20もの役職に就き、地域交流活動に寄与しています。

「荒高連」が、指定管理者（公の施設の管理を任される団体）となり、「荒川山吹ふれあい館」の受託をするようになったのも（平成17年から）、齊賀さんの尽力があったからです。

「NPO法人になった理由もそうですが、区に面倒を見てもらうだけではいけないと思います。みずからも事業者となって、元気な高齢者が地域で働き、知識や経験を生かしていきたいですね。これからの老人クラブは自主自立をかかげて、『活動する高齢者クラブ』へと変わっていく必要があるのではないのでしょうか。」

山吹ふれあい館の管理者選定の最終プレゼンテーションで最後まで残り、「赤ちゃんから高齢者まで利用できる、まったく新しいコミュニティサロン」を目指した「荒高連」の企画が採用されました。

「プレゼンに参加した荒高連のメンバーは、3人合わせて243歳（笑）。どこから手をつけていいのかわからないし、四苦八苦した」そうですが、「地域の支えになりたい」という齊賀さんの思いが、いま、大きく実を結んでいます。

「生涯現役」をモットーに、地域社会の向上を担う

2010年における日本の高齢化率（総人口に占める65歳以上の割合）は22.5%で、世界第1位。「5人に1人が高齢者」という社会を迎えています。

それにともない、高齢者の「社会的な孤立」が深刻です。「高齢社会白書」（平成22年度版/内閣府）は「高齢者全体では8割が生きがいを感じているが、友人がいない人は4割、近隣との付き合いのない人は6割にとどまっている」と伝えています。60歳以上の「近所の人たちとの交流」は減少しているとの報告もあり、人とのつながりが希薄になっているのです。

「孤立を防ぐには、地域社会における支え合いが不可欠。同世代同士が喜び合うことが不可欠」と考え、「荒高連」では、スポーツ大会や芸能大会の企画・運営、会報を発行。高齢者の支援活動を展開しています。

現在、「荒高連」には、6支部・81クラブ・約8000名が参加。加入率は、14%。東京23区の平均加入率（約10%）を上回っているのは、「荒高連」が高齢者活動の中心として期待されているからです。荒川区ではたくさんの高齢者が、輪投げ、カラオケ、ベタンク、グラウンドゴルフ、国際交流などの行事に参加しながら、自助・共助・公助の精神を育んでいます。

「荒高連の活動のアイデアを思いついたら、たとえ夜中でさえパソコンを立ち上げ、メモを残したこともあった」という齊賀さん。81歳になったいまも、決して立ち止まることはありません。「生涯現役」をモットーに、すぐに行動する。スケジュールは数カ月先まで埋まり、休日もままならない中、それでも齊賀さんは、快活さを失いません。

「ボランティアの一環」と謙遜しますが、高齢者を地域活動に引き出す牽引役、まとめ役として、人の「和」と「輪」を広げているのです。

